宇宙生命哲学 ことはじめ 64

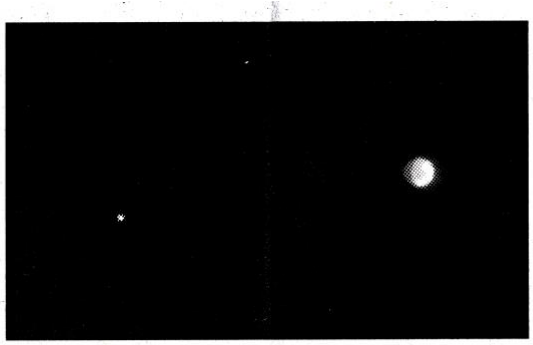
北里環境科学センター
名誉顧問／宇宙生命哲学者
伊藤 俊洋

宇宙から地球を観て考えること

ヒマラヤ山脈や南極大陸など、訪れるのが困難であった地域が、装備や技術の進歩で、かなり手軽な観光地へと変貌した。今や、宇宙が次世代の有望な観光地になろうとしている。月旅行もその1つで、NASAのアルテミス計画は秒読みの段階に入っている。

何を目的に月へ行くのだろうか？月から見える景色は、地球と太陽と満天の星である。その中で、人々にひときわ大きな感動を与えてくれるのは、我々が棲む母なる地球であろう。人類を含めて、すべての生命を育んできた生命の星を、宇宙空間から自分の目で観る感動は、想像に難くない。人類の究極の望みは、宇宙から、漆黒の闇に浮かぶ地球の生の姿を見ることにある。この経験をした人は人類史上12名いる。それは、およそ60年前の米国アポロ計画のアームストロング船長をはじめとするアポロ月面探査隊の人達である。

この経験を、地球上で体験するミニ実験場を作ってみた。天井と床と壁を暗幕で覆い、真っ暗にした部屋の天井から蛍光塗料で青く塗った直径10センチメートルの球（地球）を吊るし、その球から2・5メートル離れたところに、黄色く塗った直径2・5センチメートルの球（月）を吊り下げた（図は実験場の地球と月の模型）。LEDブラックライトで2つの球を照射すると、漆黒の闇に、青く輝く地球と、黄色く輝く月が宇宙空間の位置関係を縮小した形で3次元の像として浮かび上がってきた。暗黒のしじまの中に佇むを孤独な生命の星を、遥かな宇宙から見ている感覚である。多くの子供たちと、この素朴な感動を分かち合いたい。



宇宙空間で太陽光を受ける地球と月の模型

宇宙科学の研究は別として、巨額な経費を使い、物見遊山で危険な宇宙に出かける時ではない。地球上で様々な模擬体験をすることにより、地球環境の愛おしさを認識し、地球環境の保全に集中すべき時である。38億年という長い生命の歴史の中で、ひときわ賢く進化したはずの人類が、今、国境を挟んで、血で血を洗う凄惨な戦争をしている。この惨劇を目の当たりにして、われわれは、なす術もなく立ちすくんでいる。宇宙から地球を見ると、人類が勝手に引いた国境などはどこにも見えない。人間以外の生物は、国境とは関係なく、自由に地上や海の中を移動している。戦争の指導者たちは、宇宙空間の模擬体験をすることで、自分達の所業の愚かさに気がついてくれるだろうか。